役員エッセイ

大通公園を望む窓辺から

「言葉の架け橋」としての精神鑑定に魅せられて

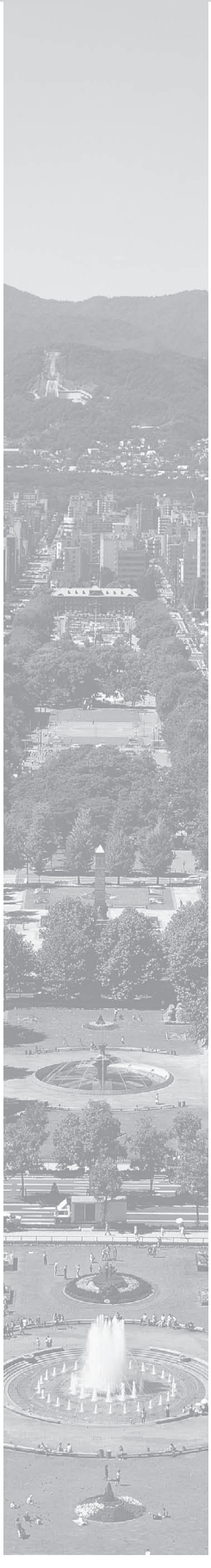
理事　中條（なかじょう）　拓（たく）

旭川の地で精神科の日常臨床に携わる傍ら、検察庁や裁判所からの依頼を受けて時々精神鑑定を行っています。この重い責任を伴う業務には、実は普段の診療とは一味違う、独特の知的なワクワク感と醍醐味があるのです。

私たち医師にとっての「当たり前」の常識は、裁判官、弁護士、検察官、裁判員といった非専門家の方々にはなかなか伝わらないことがあります。例えば、患者さんが抱く「幻覚や妄想」が犯行にどのように影響したのかを説明する際、難しい専門用語で押し切ることはできません。対象者の成育歴、性格、当時の環境、疾患などがどのような影響を及ぼして対象行為に至ったのかを丁寧に紐解き、誰もが「なるほど」と納得できる客観的な根拠と、筋の通った論理で説明する必要があります。この医学の知見を分かりやすい言葉へと「翻訳」し、説得力のあるストーリーを組み立てていくプロセスに、私は何よりの面白さを感じています。

また、時には法廷に出廷して証人尋問を受けることもありますが、証言台に立つ際、法律のプロである司法関係者の皆さんと交わすディベートは、普段の臨床では味わえない緊張感と興味を感じます。彼らは我々医師とは異なる視点や論理を持ってこちらの評価に切り込んできますが、こちらも精神医学の知見を武器に、必死に説明を試みます。医療と司法という異なる世界が交わり、互いのロジックをぶつけ合いながら一つの「真相」へと近づいていく過程には、とてもダイナミックな面白さがあります。

患者さんの問題解決に寄り添う臨床医としての目と、事件の現場で起きた出来事を精神医学の観点から解明を試みる鑑定医としての論理の目。この二つの視点を行き来しながら、精神鑑定という特異な仕事に、これからも私自身の知的な挑戦として楽しみながら、そして真摯に向き合っていきたいと思っています。



ランニングと熊

理事　西條（さいじょう）　泰明（やすあき）

一時、BMIが25を超え、総コレステロール値も220mg/dLを上回ったことをきっかけに、それまで敬遠していたランニングを始めた。GPSウォッチで距離やペースを記録するうちに大会にも出てみたくなり、2017年から「丘のまちびえいヘルシーマラソン」に参加、その後は年に数回、各地の大会を走るようになった。

日頃の練習場所は忠別川沿いの河川敷である。旭川医大付近から東神楽町、東川町方面へ、信号や自動車の排気ガスに煩わされることなく10km以上走ることができる。しかし2022年、ヒグマがこの河川敷を伝って市街地近くまで出没した。その後も忠別川沿いでは痕跡が時折確認されている。遭遇する確率は低いとは思うものの、出会ってから逃げ切ることは難しい。以来、特に上流方面へ走ることは控え気味になった。

「千歳JAL国際マラソン」には過去２回出場したが、2026年の第46回大会は千歳市内でのクマの出没状況を受けて中止となった。森林の中を走る区間が長いだけに、残念ではあるがやむを得ない判断だろう。

出張先でもできるだけ走るようにしている。昨秋、秋田市を訪れた際には、市中心部の千秋公園（久保田城跡）でもツキノワグマの出没が相次いでいた。早朝、人通りの少ない時間に走りながら、「ここは本当に安全なのだろうか」と少々落ち着かない気分になった。トレイルランニングを楽しむ方々にとっては、さらに切実な問題だろう。

近年の北海道や東北のクマの出没状況をみると、問題は山歩きやランニングだけに限らない。日常生活との境界にまでクマが近づいていることを実感する。安心して外を歩き、走れる環境を守るためにも、実効性のある対策が進むことを願っている。